



話題の本棚

東畑開人著『雨の日の心理学こころのケアがはじまったら』

藤高和輝著『バトラー入門』

特集 / HERO

新刊コーナー / 新書コーナー / 私の本棚

〒606-8316

京都市左京区吉田二本松町 吉田南生協会館 2 階

Tel: 771-6211 / E-mail: ku-teiyo@univ.coop

綴葉HP: http://www.s-coop.net/about_seikyo/public_relations/

誰にでも訪れる、いっしょに雨が降る日のために

雨の日の心理学

こころのケアが

はじまったら

東畑開人著 KADOKAWA



「こころのケアは、はじめのものではなくて、はじめていしまうものである」。まえがきからぐっと心を掴まれてしまう。学校に行けず眺めていた教育アプリ、深夜に突然電話がかかってきた携帯の画面、こころのケアがはじま、ってしま、った光景が思い起こされる。読者の中には、今まさにケアの真っ只中にいる方もいるだろう。本書はそうしたこころのケアに関わる人々へ向けた公開授業をもとにした実践的なケア入門書である。

雨の日の心理学

著者、東畑は医療人類学の知見を用いて、「こころのケアの九割五分は素人によってなされている」という認識を本書の根底に置いている。例えば普段の生活で挨拶をする、雑談に興じる、困りごとを代わりにやってもらう、早めに休養をとるといったありふれた普通の気遣いがまさにケアであり、こうしたケアが自然に回ることで晴れの日は続いていく。ここには日常を共に過ごす素人にしかわからない個々人への深い理解が活かされている。

しかし、突然上手くいかない日が続いてくる。いつもと変わらないはずの声掛けが煩わしく感じ、いつも通りに行動できない雨の日の。普段とは違う異常な状態を理解し、ケアするためには専門的な

知識が必要だ。本書が扱うのは「専門家のための心理学を、素人のための心理学に微量だけ忍び込ませた」雨の日の心理学なのだ。

そもそも、こころのケアとは何なのか。「傷つけないこと」だと東畑は述べる。傷つけないためには何が必要か、それは相手のこころを理解することだ。個々の経緯や事情によって必要な対応は異なり、画一的な対応は暴力にもなりうる。適切なケアを行うためには雨が降っている相手のこころを受け取り、解釈しなければならぬ。普段とは違う異常なこころの振る舞いを解釈するには補助線となる専門的な理論が必要であり、こころを受け取るためには話のきき方や外的な環境の整え方といった実践的な技術も重要である。本書はこの双方をバランスよく解説しており、更には具体的な状況まで踏み込んだ質問と返答、ケアを続けるためにケアをする人がケアされる秘訣まで。雨の日を過ごしてきた先人の苦悩と知恵が詰まっている。

ケアを求めることは難しい、けれど……

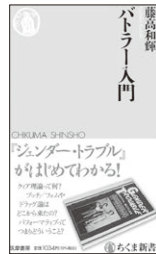
本書の終わりに「わかってもらえないかもしれないという恐怖を乗り越えられず人に相談できない」という質問が取り上げられる。質問を発したのはケアをしている人達からだが、ケアされる側も抱える困難だ。東畑はこの質問に対して歯切れのよい答えを出せていない。しかし、本書を書き、ケアの価値を提示し、他者をわかろうとする人がいると伝える行為自体が返答になっていると感じられた。ケアを求めることは難しく、無理解から偏見を負う恐れもある。本書が多くの人の手に届き、より良いケアが普及するとともに、ケアを求めることへのステイグマが軽減されることを期待したい。(後)

(三三三頁 税込一七六〇円 9月刊)

社会的規範を「攪乱」するという抵抗

バトラー入門

藤高和輝著
ちくま新書



ジェンダーについて論じる上で避けては通れないと言われる『ジェンダー・トラブル』。その著者こそ、哲学者でありフェミニスト・クィア理論家でもあるジュディス・バトラーだ。だから私は、哲学的な入門書のもりで本書に触れ……そして、面喰らった。

まず本書は、バトラーの哲学的な論理に立ち入らない。代わりに、当時のフェミニストやセクシュアル・マイノリティを取り巻く社会的、歴史的、思想的文脈——そんな「現場感覚」の理解を重視。だから本書には、生き生きとしたエピソードがたくさん登場する。そして更に私を驚かせたのは、心の声までダダ漏れの砕けた文体だ。とっつきやすいが、バトラーの入門書が「これ」でいいのか!?

著者は本書のスタイルを、一風変わった「クィアな方法」だと述べる。どうやら本書の内容に、その意図を読み取る鍵がありそうだ。◆バトラーにおけるジェンダーの問題

ひとまず、バトラーの理論の一部を見ていこう。著者によれば、『ジェンダー・トラブル』の核心にあるのはジェンダーの不連続性つまり、セックスはジェンダーを規定しない、ということだ。だからジェンダーとは、模倣の中で流動的に「生きられる」ものなのであって、そこに「本物／偽物」は存在しない。しかし現実には、特

定のジェンダーの在り方が「偽物」として抑圧されている。抑圧を生む、性別二元論や異性愛規範に、バトラーはどう抵抗するのか。

◆クィア・ムーブメント

ここで、バトラーの理論そのものではないが、バトラーの抵抗戦略と重なる当時の運動、クィア・ムーブメントについて説明したい。

「クィア」という語はもともと「変な」といった意味で、セクシユアル・マイノリティに対する侮辱語だった。しかし一九九〇年にこの「クィア」を自称する運動団体が現れた。この人々は、マジョリティから差別的に発される「クィア」の語を、多種多様なセクシユアル・マイノリティの連帯を示す言葉として流用・再配備し、運動を行った。これにより、その言葉の価値は転換され、「クィア」を差別してきたジェンダー規範や異性愛規範が批判的に問い直されることとなったのだ。——そう。この、規範の「攪乱」こそが戦略。バトラーも、人々の実態に即して『ジェンダーを増やす』ことで、既存のジェンダー観を攪乱することに可能性を見出していたのだ。

◆「クィアな方法」とは？

さて、改めて本書のスタイルについて語ろう。実は著者は「哲学的な切り口」を避けるだけでなく、男性哲学者の話に極力頼らない、とも序文で宣言しており、これには非難の声もある。わざわざそんなことをする「クィアな方法」とは何か？ 今の私はこう理解する。それは、入門書が堅苦しくて男性哲学者ばかりだったとしても非難されないであろう哲学界の規範意識に対し、それを「攪乱」する、そんな抵抗戦略としての「クィアな方法」なのだろう、と。(朝露)

(二二八頁 税込二〇三四円 7月刊)

2014年に連載開始した『僕のヒーローアカデミア』がこの夏完結した。そして2024年12月、単行本最終巻が発売に。これは、大好きなヒロアカの完結を勝手に祝って、勝手に企画された、みんなが最高のヒーローについて語る特集だ。

〈特集〉

HERO



ある人は叙事詩に残る英雄を挙げた。推理小説が大好きなあの人は、探偵を。みんな大好きアンパンマンも忘れてはいけない。そうして気づいたのは、洋の東西を問わず、いつの時代も人はヒーローに憧れていて、けれどもヒーローの姿はさまざまということ。

そこでこう問うてみよう——「ヒーローとは何か。」
三者三様のヒーロー談義。集まればきっと何かが見えてくる！
(ひるね)

英雄叙事詩——原初のヒーローたちの軌跡

超人的な力を持ち、敵を打ち倒すヒーローたち。彼らの活躍に、葛藤に、心躍らせるのは何千年も昔から人類に共通の営みであった。英雄たちの姿を素朴に、しかし力強く伝える英雄叙事詩は古今東西、原初のヒーローたちの軌跡を歌い上げてきた。

死の運命と英雄たち

「ヒーロー」という言葉は古典ギリシア語の *hros* (*hros*) に由来する。彼らは神話の時代に生き、神々の血を引き、歴史時代の人間たちが到底敵わないような力を持っていた。しかし『イリアス』(岩波文庫)に登場する英雄たちは人間離れた力を持ちながらも、我々と同じように怒り、悲しみ、苦しんでいる。トロイア戦争の一幕を歌った『イリアス』はゼウスの神慮によってアキレウスと大將アガ멤ノンの間を諍いが生じるところから始まる。この諍いに終止符が打たれるのは、多くの英雄たちの犠牲を経た後であった。半神である彼らは同時に死すべき者でもある。だからこそ彼らは限りある生の中、自らの不朽性を担う誓いを求め、戦いに身を投じる。そんな彼らの生き様は、英雄叙事詩によって悠久の時を経て現代を生きる我々にも伝わっ

てくる。

ホメロスに先立つ古代オリエントの英雄叙事詩『ギルガメシュ叙事詩』(ちくま学芸文庫)においても、人間たる英雄の死すべき運命は大きな主題となっている。都城ウルクの王ギルガメシュは友エンキドゥの死をきっかけに、永遠の生を求め流離う。世界の果てにいた大洪水の生き残り、ウトナピシテティムのもとを訪れ、あと一步で望みを叶えんとするが、失敗して涙する。その後の彼がどうなったかは分からない。我々人間はいつの日か死ななければならぬ——英雄叙事詩はそんな運命と向き合った人々の足跡である。

中世ヨーロッパを代表する英雄叙事詩の一つ『ニーベルングの歌』(ちくま文庫)は前出の作品と比べ、封建的、宮廷的な雰囲気がある。舞台はブルグント、ニーデルランド、アイスランド、そしてフン族の王エッツェルの治める国と広域にわたる。あるとき、ブルグントに非常に美しい姫クリムヒルトが生まれた。クリムヒルトとのちに夫となるジークフリート



トとの恋、そして彼の暗殺は彼女の祖国に災いをもたらすことが示される。大きな戦いのきっかけとなったのはしかし、クリムヒルトとブリュンヒルトという二人の王妃であった。恋のモチーフの導入に伴って前景に躍り出たヒロインは、ヒーローに劣らぬ存在感を放ち、滅びを齎すこととなる。最終的に「死すべきものは皆、倒れてしまった」。これが英雄であっても逃れられない、人間たちの運命である。

神たる英雄

英雄が必ず死すべき人間であるわけではない。チベットの英雄叙事詩『ケサル王物語』（岩波文庫）の主人公ケサル王はトエパ・ガフ神が転生した姿である。仏敵を打ち滅ぼすという使命を果たすため生まれた彼の活躍は、時に勇敢に、時にユーモラスに語られる。最終的に王は天界へ還るが、常に人間界を見つめ、必要とあらば舞い戻ってくる。

『アイヌ叙事詩 ユーカラ』（岩波文庫）所収の物語にたびたび登場するオキクルミ（オイナカムイ・アイヌラックル）も、英雄であり、また同時に神である。ユーカラのそしてアイヌの信仰の中では、鳥や熊等々の動物は、神として扱われ、描かれる。彼らの悪さをオキクルミは懲らしめ、人間たちに書を与えないうようにする。

このような神々英雄は叙事詩上の人物としてのみならず、人々の信仰、生活の中に深く根ざした存在であった。

口承文学としての英雄叙事詩

これまで紹介した作品に共通するのは、それらがもともと口承叙事詩であり、ある時点で編纂され、書き留められ文字として固定されたという点である。口承で伝えられていく

名探偵というヒーロー、その残酷と悲壮

事件あるところに、名探偵は現れる。快刀乱麻を断つ推理で謎を解き、犯人の計略を暴き立て、世界の秩序を回復する——彼らこそ推理小説のヒーローだ。特撮ドラマにウルトラマンや仮面ライダーがいるように、西部劇にさまざまなガンマンがいるように、推理小説には名探偵がいるのである。人並外れた推理力を持ちつつ、決して超能力を持っているわけではない彼らは現代ドラマにも登場しやすいので、お茶の間でもっとも親しまれているヒーロー像といえるかもしれない。

そんな名探偵は一般に、内なる傍観者とも言うべき属性を持っている。事件に関わることで捜査し、推理すると同時に、事件全体に対して俯瞰できる立場を与えられているの

過程で様々な伝承が混じりあい、描かれた英雄の姿も少しずつ変容していく。それでも、英雄叙事詩における彼らの本質的な姿——人並外れた力を持ち、敵を打ち倒し、その姿は人々の憧憬の的となる——は変わらないままであった。

原初のヒーローたち。彼らの誉れは海山を越え、時を超え、今も生き続けている。（荒砥）

だ。彼らはそうして事件の全貌を把握することと、もうひとつの特権的存在——事件の黒幕を指摘する。特定の組織、とりわけ警察に埋没することなく、それどころかときに公的権力を出し抜きながら事件を解決する名探偵の社会的地位の曖昧さは、こうした特権性を反映したものである。その性質はまた、彼らのヒーロー性をも補強するだろう。

けれどもこの特権性こそ、現代の推理小説が抱える問題だった。あくまで人間の身でありながら、名探偵は神様にもなったようにすべてを見通し、超然と振る舞う。いったい何が、彼らの特権を保証するのだろうか？

神託としての名探偵

名探偵とは「存在であり意志」である——

そう答えるのが、北村薫『冬のおペラ』（角川文庫）に登場する名探偵・巫弓彦だ。彼は、名探偵とは行為やその結果ではないという。「ある時に自分がそうであると「気づく」のだと。それは事件や捜査に先んじて下る神託である。ゆえにその特権性も、真実を見抜く能力も、人間を超えた次元で保証される。

けれどもこれは、残酷な話でもある。事件あるところに、名探偵は現れる——逆に言えば、事件がなければ名探偵の出番もない。同書において、巫弓彦は事件がない限りアルバイトで糊口を稼ぐ。そうして、解くべき事件を訪れるのを待っているのだ。もしも事件と出会えなければ、彼はただのフリーターである。それでも彼は名探偵なのであり、気付いてしまったからにはそう生きるほかない。その生き方を臆いて、語り手のあゆみは言う、

『名探偵』って、可哀相なんですねえ。だからこそ興味を惹かれ、巫の助手を買って出たあゆみの眼から見る彼の姿は、凜として、博識で、頼れる名探偵のそれでありながら、どうしようもなく、哀しく。

人間としての名探偵

名探偵として生きること、その悲壮を書いた作品としてエラリー・クイーン『九尾の猫』（ハヤカワ文庫）も挙げたい。主人公となる名探偵は作者と同じ名前である。その彼、

エラリーこそ、ミス・テリ史上で最も名探偵の特権性に悩んだ人間だった。

舞台は、戦後まも

ないニューヨーク。前作『十日間の不思議』で敗北を喫したエラリーは、傷心も癒えないままに新たな事件へ挑むことになる。巷を騒がせる連続殺人鬼「猫」を捕まえるためだ。果たしてエラリーは殺人の連鎖を止められるのか。そして彼は、名探偵として復活できるのか？

小説は、エラリーから容赦なく、名探偵としての特権性を奪ってゆく。彼は連続殺人を止められず、その推理は犯人によって誤導されてしまう。さらに本書は、序盤からホロコーストへの言及を散りばめ、連続殺人を大量死の記憶と重ね合わせてゆく。無差別的で理不尽な殺人がもたらすパニックは、大都会を



一種の戦場に変えてしまつたのだ。その混沌を前に、エラリーという個人は無力である。

けれどもそうして打ちのめされた先、エラリーはひとりの人間になる。目の前の死を単なるデータとしてしか見ていなかったおのれを反省し、「それぞれの死を特別なものにするのは愛だ」と知るのだ。そして彼にしかできない仕事として、名探偵は捉え直される。

それは「昇華行為」である——超越的な立場から人間の死を数字に還元するのではなく、むしろ死によって均された人間たちから、固有のものを掲げ上げること。エラリーは失敗したかもしれない。これからも失敗するだろう。けれども「それが人間の本性であり、役割でもある」。このとき名探偵は、あくまでも人間的で等身大のヒーローとして立ち上がるのだ。再生への祈りが籠められた、戦後ミステリーの里程碑的傑作である。（水炊き）

現代の英雄——私たちの中に住むヒーロー

今一度問おう。ヒーローとは何か。それは

自らが持つ特権的力を行使し、強敵を打ち倒す者だろうか。どうやら、現代の英雄の定義はそれでは足りない。囚らずもエラリーはそれを示した。その特権的力ではなく、どう

ありたいかというその姿勢に人々はヒーローを見る。きっと、私たちの中にあるヒーロー像がそれを示しているからだ。

ヒーローの原点

人生で最初に出会ったヒーローを尋ねたら

多くの人が彼の名を挙げるだろう。そう、アンパンマンだ。彼は毎日パトロールをして、お腹を空かせている子がいたら、顔をちぎってあなばんを差し出す。ばいきんまんが誰かを困らせていたらアンパンマンで撃退する。

『アンパンマンの遺書』（岩波現代文庫）は、そんなアンパンマンの生みの親、やなせたかし氏の自叙伝。本書は、第一次世界大



戦終結の翌年、一九一九年に生まれたやなせの幼少期から始まる。アンパンマンを軸にしたやなせの人生が起承転結の四コマ漫画で表されている。アンパンマンが初めて世に出たのは存外遅く、やなせが五〇歳のときだった。やなせは、アンパンマンがいつどうやって生まれたかははっきり解らないと言った。第二次世界大戦が与えた影響は大きいようだ。高知から上京してきた東京高等工芸学校時代、そこには自由の風が吹いていた。しかし卒業後すぐに戦争が始まる。やなせも徴兵され戦場へ。本書には戦後の思いが綴られている。

「正義のための戦いなんてどこにもないのだ。正義は或る日突然逆転する」と。このときアンパンマンの原点に至る。「逆転しない正義とは敵身と愛」であり、それは「眼の前で餓死しそうな人がいるとすれば、その人に一片

のパンを与えること」だ。

アンパンマンのヒーロー性は、敵ばいきんまんを倒すことにあるのではない。目の前に人に手を差し伸べるというあり方だ。私たちの原点にはそんなヒーローがいる。

「アンパンマンは君だ」

このアンパンマンを原点とするヒーローが『僕のヒーローアカデミア』（ジャンプコミックス）のNo.1ヒーロー・オールマイトだ。この世界では、人口の約八割が特異体質〈個性〉——触れたものを無重力状態にしたり、汗腺から出す物質を使って爆破したり——を持っており、誰もが憧れる「ヒーロー」という職業が存在する。この物語は、ヒーローを養成する雄英高校ヒーロー科を舞台にした、皆が「最高のヒーローになるまでの物語」だ。しかし、ヒーロー志望の主人公・緑谷出久は〈無個性〉だった。力無き者がどうやってヒーローに？



ある日、緑谷は敵に襲われているところをオールマイトに助けられる。彼は敵を倒すと足早に去っていく。緑谷は追いかけ、尋ねた。「個性」がなくてもヒーローは出来ませんか。このとき、オールマイトの答えは非情かつ現実的だった。「個性」がなくても成り立つ

とはとても言えない」と。

失意の帰り道、また敵騒動に遭遇する。敵に捕まっていたのは幼馴染の爆豪だった。きつとすぐにヒーローが来るはず……。そう思い見守っていたはずの緑谷だったが、気づけば飛び出し——彼に戦える力はないのに——爆豪に手を差し伸べていた。そこにオールマイトが再登場。敵を倒すと今度はこう言う。「君はヒーローになれる」。目の前の困っている人に手を差し伸べる、その姿にオールマイトはヒーローの本質を見た。そして、自身の髪をちぎって差し出し、巨悪に立ち向かうための特別な〈個性〉を緑谷へ譲渡した。

〈無個性〉になったオールマイトは、それでもヒーローであり続ける。いずれ〈個性〉を手放すことになる緑谷もそうだ。人をヒーローにするのは、もっと別のものだからだ。

少し前に、台湾の地下鉄で刃物を振り回す男を乗客が取り押さえたというニュースを見た。インタビュに答えるその勇者はこう言った——ヒンメルならそうした。「葬送のフリーレン」に出てくる勇者の名だ。古の叙事詩の英雄らがそうであったように、小説や漫画で出会う現代のヒーローもまた、私たちの生活に根ざし、心の中に住み着いて、「次は君だ」と私たちの背中を押す。(ひるね)

新刊コーナー

アイデア2024年10月号
特集・紙媒体がつかなく未来
雑誌・同人誌・トリプレスをつくるひとたち
アイデア編集部編 誠文堂新光社



先日、秋の知恩寺古本まつりに足を運んだ。青空のもと、私は茶色く薄汚れた本の山々と格闘していた。最近好んで買うのは大正・昭和期発行の同人誌。どれも意匠が凝っており、内容も熱を帯びている。たとえば一九二〇・三〇年代の同人誌であれば、当時最先端のアヴァンギャルド芸術を取り入れ、表紙も本文もかなり尖ったデザイン。本づくりの最前線は同人誌にある——本の山々と格闘しながら、私はそんなことを考えていた。

一九二〇・三〇年代は「同人雑誌全盛時代」と呼ばれるが、それから約百年後の現在、同人誌は再び全盛時代を迎えつつあるように感じられる。文学フリマの熱気は言わずもがな、周りを見渡せば、同人誌を売っている書店や同人誌を作っている人の数はかなり多い。こうした「同人誌ルネサンス」とでも呼ぶべき状況を受けて、改めて「雑誌・同人誌・リ

トルプレス」という視点から紙媒体の未来、そしてその可能性を探ったのが本書である。

最先端を行く計一三の雑誌の誌面が美しい写真とともに紹介されるほか、その作り手へのインタビューも同時に掲載されるなど、本書の充実度合いはかなりのもの。近年のZINEの潮流を分析した野中モモによる記事や、文フリ事務局代表が語る文フリのこれまでとこれからなど、読み物としても面白い。

現在、京大生協ルネにも（京大関係者による）同人誌コーナーが設置されている。あなたの同人誌も一度並べてみては？（ば）

（一五六頁 税込三三三〇円 9月刊）

単調な空間

1949-1978

新装版

北園克衛著
思潮社

《白いカメラ
のなか
の白い孤独は
白》

孤独の白い孤独である——「白い装置」

北園克衛の名を、ぼくはまずグラフィックデザイナーとして知った。古いハヤカワ文庫の探偵小説で、彼は装幀を担当していたのだ。

白と青を基調とした画面に、黒や赤、黄、緑の丸あるいは四角から構成された図案はいつも清冽だった。

そして彼はまた、詩人でもあった。本書はそんな北園克衛の、戦後作品を集めた一冊である。同時刊行された戦前篇の『記号説』と併せれば、彼の詩作の変遷が眺められるだろう。それはいわば、具体から抽象へと至るひとつの実験である。

とりわけ本書においては、形式面の実験性が顕著だ。透徹した白、すなわち頁がまずあって、そこに孤独や死をめぐる不穏なイメージ、あるいは丸、四角、空間といった抽象的な言葉が置かれてゆく。言葉は反復や対称性をもって並べられ、パズルのように非人間的な印象を残す。けれどまぼくが彼を知った探偵小説がそうだったように、精緻な人工性ほときに抒情を持ち得るのだ。読み終えて脳裡に浮かぶのは、虚空に置かれた四角形である——それは究極に孤独で、静謐な風景だ。

やがて彼の実験には、言葉ではなくカメラが用いられるようになる。それを見てぼくは彼にとってグラフィック・デザインと詩作は同じことだったのではないかと思った。彼はずっと言葉ではなく、幾何学的なイメージによって詩を綴っていたのである。（水炊き）

（一三〇頁 税込二六四〇円 6月刊）

安全に狂う方法 アディクションから掴みとった こと

赤坂真理著 医学書院



「わたしを殺しそうになってまで救いたいわたしがいた」言葉にすると矛盾している。頭で考えると理屈に合わない。けどわかる、そう思った。死の誘惑が目の前をちらつくと、破滅的な行為に身を委ねたくなるとき、私は自分の奥底から、「生きたい」という叫びを聞いた気がした。

本書は依存症の当事者が実体験を綴ったものだが、筆者にとって依存症の本質は「アディクション」——飲酒、ギャンブルなど具体的な行為ではなく、何かに強く「とらわれ」ている状態そのもの——人間にとって根源的な感情だ。本書の目的は、抑圧された感情が自殺や他害として暴発する前に、そのエネルギーを安全に変換する方法があると伝えることにある。

不思議な読書体験だった。むきだししの感情が詩のように渦巻く。経験のひとつひとつが神秘的な祝祭の太鼓のように響いてくる。整理されていない語りに最初は戸惑う。でもそ

れは、文章を生業にする彼女が、なによりも「言葉」の功罪を知り尽くしているからだ。

最も逃れにくいアディクションは「思考」なのだと言う。言葉が自分を凌駕して、思考を自分自身だと思いついてしまふ。自分と問題を切り分けるためには、「身体」へ目を向けることが必要だ。だから筆者は、冥想やパフォーマンス・アートに活路を見出した。理路整然とした言葉で規定される世界が取り落としてきたなにかを、本書はすくいとろうとしている。アディクションから読み解く人間の取り扱い説明書。
(二六〇頁 税込二二〇〇円 6月刊) (くたくた)

文化はいかに情動をつくるのか 人と人のあいだの心理学

パチャ・メスキータ著
高橋洋 唐澤真与訳 紀伊国屋書店



情動とは何を指すのか。著者はこの語に対する明確な説明を避けている。しか

し、人と人との関係性、つまり、社会と自己の結びつきという外部要因によって構築される内面にある感情であると仮定している。

本書は、自己の内面ある〈へこころ〉そのも

のではない、〈へこころ〉が社会や文化との対話によってどのように構成されるのか、という点に注目する。特に「日常経験の中で構築されていく情動のしくみ」……つまり、情動がどのように生じ、それをどのように表現するのかは文化によって異なるということを説明している。例えば、カナダ北西部に住むトゥク族の人々は、「怒り」は不道徳な情動と捉え、これをあらわにした人に対して村から追放するほどの嫌悪を抱く。これは、彼らの文化の産物であり、我々とは共有できない。また、個人の人生を通じた経験も文化的背景を構築する要因の一部であり、情動の抱き方に大きく影響を与える。これが、情動そのものに個人差を生み出すのだ。そして、情動が多様であることを理解すれば、他者の情動を理解し、異文化への適応が容易になると筆者は説く。結果として、多文化共生社会において衝突回避の一助となる。

他者の〈へこころ〉を理解することは簡単なことではない。ただし、異なる文化的背景を持つ人々による情動への理解が詳しい事例とともに記載されている本書を読むことで、少なくともイメージを浮かべやすくなるだろう。あなた自身が他者の〈へこころ〉を理解するための一助となることは間違いない。(フウチ)

(四三三頁 税込三三〇〇円 8月刊)

危険なトランスガールの おしゃべりメモワール

カイ・チェン・トム著
野山毛モト訳
晶文社



陰鬱なカナダの町
グループ。中国から
の移民の両親に男の
子として育てられた

暴力的で夢見がちな「あたし」は、トランス女性として生きるために故郷を飛び出した。煙と光の街の「奇跡通り」には魅惑的な同志が大勢いた。しつこく絡んでくる男は父親仕込みのカンフーでなぎ倒す。殺された友のためガールズとともにギャングを結成して夜の街を暗躍する。「いまやあたしは彼女たちとここにいて、どんなことだって起こるんだ」。

本書は中国系カナダ人のトランス女性作家カイ・チェン・トムの自伝的小説であり、彼女自身をモチーフとした主人公の「あたし」が過去を回想する。冒頭で彼女は本書に通底する問題意識を提起している。「本当に頭に来てるのは、こういう物語の語られ方なんだ」「浅黒い肌の泥棒トランスガールの物語はどこにある?」最後に報われる物語はトランスジェンダーを優等生のように描き、暴力も自傷も犯罪もある現実を矮小化する。悪い存在

でいる権利、自分の望む自分でいることの権利は全ての人にある。だからこそ「あたしたちガールズのために危険な物語を書く」のだ。幽霊、人魚、蠅螂拳、ポケットナイフ。暴力とファンタジーがいりまじる濁流のような描写を浴びて、虚構と現実の境目を見失い、溺れそうになった。それは苦しいと同時に、凄まじい高揚でもあった。トランス差別やヘイトクライムといった厳しい現実の中でも自身と仲間を肯定する「あたし」の言葉は、読者の心をも解放する。必要とするすべての人に届けべき、危険で優しい物語。(たいやき)

(二三三頁 税込二五三〇円 8月刊)

大使とその妻(上・下)

水村美苗著
新潮社



現れる謎に惹きつけられ、愛憎に「喜一憂し、ページを捲る手が止まらない」。

それが小説を読む楽しさとしたら、水村美苗の小説はまさにその代表例だ。新作『大使とその妻』も無論その例に漏れない。

主人公は日本の伝統文化に魅せられながら

も、現代の喧騒を避けて軽井沢で静かな暮らしを送るアメリカ人、ケヴィン。長らく無人だった隣の山荘が、ある時突然洗練された日本家屋へと改築され、彼はそこで美しくも妖しい婦人が月夜に能を舞っているのを目にする。消えゆく日本文化に惹かれる思いから彼はその隣人夫妻と親交を深めてゆくが、それは彼とその婦人、二人ともにそれぞれの過去との対峙を迫るものでもあった——と、ここまで書けば、魅力的な小説の道具立てが勢揃いしているのが納得してもらえらるだろうか。何よりもまず、面白い小説だ。

そして本作は、水村がこれまで追求してきた「日本」への問いをさらに深化させたものでもある。アメリカに生まれながらも日本文化に惹かれて移住したケヴィンは、その伝統は当然の日本人によって軽んじられ消えつつあることに悩む。文化のなかに産まれること、それに外から惹かれること。この対立を通して、日本に生まれた読者は自らの来し方を問われることになるだろう。

しかし、と僕は思う。僕達にはまた守るべき伝統は残っているのだろうか。今と未来を恐れ、憎みながらも、僕たちに帰るべき過去は残っているだろうか。この作品に抗って考えることが求められている。(コーク)

(三四四頁 税込二二〇〇円 10月刊)

奇妙な廃墟

福田和也著
ちくま学芸文庫



妖刀、それは使いた手をも蝕むのだろうか。先日若くして亡くなった批評家、福田和也の——「妖刀」というのは、ある作家が彼につけた異名である——彼のデビュー作が遂に復刊された。読み続けられねばならぬ本が蘇った。

日本の歴史と文化について旺盛に書いた後年とは異なり、このデビュー作で彼が論ずるのはフランス文学、そのなかでも人權の国、フランスが最も思い出したくない作家たち——極右と対独協力者だ。たとえば、ナチス占領下でファシズムのみがフランスに残された道だと主張し、放蕩を生きたドリュ・ラ・ロシエル。そしてヴァレリーからカミュに至るまでの同時代作家たちから才能を認められながらも、その苛烈な反ユダヤ主義的言辞によって銃殺刑に処されたロベール・ブラジャック。自国の未来を全力で思考し、それゆえに時代に受け入れられ得ない道へと身を賭した彼らの作品と人生を論ずるとき、福田は彼

らに憑依しているかのようであり、彼の筆は殺気を漲らせる。

だが、本書が放つ抗い難い魅力、それこそが最大の問題である。福田が論じ、描き出す彼らの作品と人生は我々を感嘆させずにはおかないが、同時にそれは今日において弁護しえないものでもある。豊かな文化的素養を持ち、比類ない作品をものした彼らが「悪人」であるとはどういうことなのか？

本書は福田が遺した「妖刀」である。今もあなたの喉笛に突きつけられていて、無視し通ることはできない。(コーク)

(五九二頁 税込一九八〇円 10月刊)

概説北歐神話

菅原邦城著
ちくま学芸文庫



「私ははるか先まで、諸神の、戦いの神々の、大いなる運命まで見る」。父

神オージン(オーディン)、豪傑の神ソール(トール)、奸智の神ロキ、そして来たるべき諸神の運命。北歐神話に関する書籍を読んだことがなくとも、どこかで聞いたことがある

のではないだろうか。

冒頭で引用したのは、北歐神話を語るうえで重要な資料となる『巫女の予言』の一節である。本書は、北歐語で書かれた原典を介して我々に神話世界を垣間見させてくれる貴重な一冊だ。

古代の神話を紐解く際には、資料ごとに神話の筋や神々の性格付け等が異なっていることがたびたび障害となる。北歐神話もその例に漏れず、神々の名前や彼らの事績等、伝える資料によって食い違う点が多い。それをもたらずのは地域差、時代差、そして後代のキリスト教の影響である。現代の我々が北歐神話と呼び習わしているところの資料は、多くが中世以降に口承をまとめて編纂されたものである。その原型がどのようなものであったか、我々には知るすべもないことが多い。しかしそんな中でも著者は語源や資料の歴史性、地域性を考慮しつつ、独断にならないよう読者に確からしい情報を提供してくれる。

本書は四〇年ほど前に出版された書籍の復刊だが、その価値は減ずることなく、むしろ「古典」として読み継がれるべきものとなっている。同じ著者の、より入門者向けの『北歐神話入門』(東京書籍)も併せて是非。

(四二〇頁 税込二六五〇円 8月刊) (荒砥)

価値の社会学

作田啓一著
ちくま学芸文庫

「戦後日本の社会学理論の到達点」、待望の文庫化である。

作田啓一。京大文学

部の出身にして教養部（現・総合人間学部）で教鞭をとり、日本社会学会の会長も務めた人物である。彼の名著である本書は京大の社会学徒必携の書……のはずなのだが、原著は一九七二年。入手困難な状態が続いていた。

さて、作田は本書で「価値」を社会学理論の祖上に載せ直し、日本社会の軌跡と変動を描き出す。たとえば普遍（集団超越）と個別（集団内在）という価値の対立は、それぞれ西欧社会と日本社会に、「罪」と「羞恥」の眼差しに、個人の自立と集団への半所属に対応する。そして後者の価値体系は、ホンネとタテマエの相互浸透、中央の権威への従属性といった日本社会の特質とびたりと符合する。また、太宰の『斜陽』などを題材とする実際の分析は古びるこない鋭さを誇っており、

まゆみは唯一無二の著作だと言えらるだろう。とはいえ、本書の内容はハイレベルで、相



応の見識が求められることは付言しておく。

作田の文体はスリリングな敵しき——オリジナルなものの生成が滲える輝き——を放っている。緻密で無駄のない論理は、真剣勝負で臨まない限りおそらくその影すら踏むことは出来まい。が、試みる価値はあるはずだ。

近年では岡崎宏樹「作田啓一 生成の社会学」など、作田リバイバルが目覚ましい。スターが古典となる素地がようやく整ったというところか。昨今の日本の社会学の停滞（？）に閉塞する若手たちよ、打開の種は意外と足元に眠っているかもしれない。（浅煎り）

（六〇八頁 税込一九八〇円 6月刊）

利他主義の可能性

トマス・ネーゲル著
蔵田伸雄監訳
勁草書房

現代の哲学・倫理学における大家、ネーゲルの最初の著作がついに邦訳された。



難解な一冊である。そこで今回、私はこの本の試みを、あえてラフに紹介していきたい。

キーワードは「欲求」と「理由」だ。時に、こんな経験はないだろうか。ある日あなたは、

素晴らしい人を見かける。未来の自分のために、計画的に行動できる人。他人のために、親切に行動できる人。そしてこう考える——

こんな行動をしようと思えば、その人は凄い。それに引き換え、そんな欲求が湧いてこない私は、よい生など到底送れぬ凡夫なのだ、と。大袈裟だろうか。しかし、こんな絶望を切り崩すような本書の議論に、私は光明を見た。

ネーゲルは論じる。「欲求の存在は常に行為の理由の必要条件であると信じる理由は無い」。何かをする「理由」があると認識すること、これがそが行為を動機づけると考えるべきなのだ。ここに転換がある。これにより、主観的で制御し難い「欲求」という概念に頼らずとも、未来の自分や他人に利益を与える行為が説明できるようになる。合理性や客観性に基づく利他主義の可能性が開かれるのだ。

本書は、後に著者自身によって撤回される主張が含まれるにもかかわらず、名著と呼ばれる声が高い。それは本書が、「理由の倫理学」と呼ばれる英米倫理学の思想潮流を形成したとされるからである。しかし、私はこう付け加えたい。本書が名著たりえるのは、合理性にこだわらながら利他主義を導く試みを、理性的に善く生きようともかく人の背中をそっと押ししているからでもあるのだ、と。（朝露）

（二八八頁 税込三五一〇円 8月刊）

東大ファクション論

集中講義

平芳裕子著 ちくまプリマー新書

今秋、京都国立近代美術館で「LOVEEファクション 私を着がえるとき」という企画展があった（実に良かった）。この展示が明るみに出したのは、ファクションがいかに根源的で社会的な営みであるのか、ということ。

さて、本書は標題通り、実際に東大で行われた集中講義が書籍化されたものである。そのためか流れに乗ってサクッと読めてしまう。そして本書が教えてくれるのは、ファクションそのものというよりも、それをいかに見て読み解くのか？ という視点である。

単なる流行、あるいは学術たり得ない「浅い」テーマだと思われがちなファクションだが、実は人間の欲望と技術、そして社会のあり方を鮮やかに反映している。シャネルはなぜあれほど革新的でインパクトを与えたのか。ファクションは身体規範をいかに生み出し、変革していったのか。ファクション研究の最前線はこのような広がりを見せているのか……。さまざまな角度から文化・芸術としてのファクション論の奥行きを堪能できる一冊。

(浅煎り)

(二五六頁 税込九九〇円 9月刊)

フェイクニュースを哲学する

何を信じるべきか

山田圭一著 岩波新書

米大統領選でトランプ氏が復権を果たした。フェイクニュースや陰謀論を利用して国民を煽る戦法が成功したともいえる。真偽への無関心が蔓延している——このような時代に、我々は何を信じればよいのか？

本書は、哲学者である筆者が、社会認識論などの議論を足がかりに、情報を吟味するためのチェックポイントを提案する一冊。話題の中心となるのはインターネットだ。筆者はリアルとネット空間の違いを分析することで、インターネットがむしる情報とじゅっくり向き合う時間を奪っていると論じる。

本書を一読すると、「しかし」という逆接の多さが目につく。専門家やマスメディアなら信じるに値するのか、陰謀論を信じるメリットはないのか、そもそも真理には価値があるといえるのか……常に反論を想定しながら思索を深めていく本書の姿勢こそ、立ち止まって考える「知的な真摯さ」の実践に他ならない。「信じる／信じない」の二項対立に陥ることなく、信じるべきものをじっくりと探ることを、信じるべきものをじっくりと探る続けるための指南書。

(くたくた)

(二〇六頁 税込九九〇円 9月刊)

アルベール・カミュ

生きることへの愛

三野博司著 岩波新書

作家アルベール・カミュがこの世に生を享けたのは一九一三年。第一次世界大戦の前年だった。カミュが生きたのはまさに「暗い時代」。その人生には、戦争、病氣、テロ、殺人、全体主義など、暗澹たる無数の出来事が影を落とす。しかし、カミュの評伝たる本書から浮かび上がるのは、意外なことに、カミュの心の奥底にひそむ「生きることへの愛」だ。

カミュと聞いてまず思い浮かぶのは「不条理」や「反抗」といった言葉ではないか。小説『異邦人』、哲学的エッセイ『シーシュポスの神話』、戯曲『カリギュラ』という三部作を通じて「不条理」に迫ったカミュ。彼に付き纏うイメージは基本的に暗いものだろう。しかし「不条理」三部作と「反抗」三部作に続く最後の仕事として、カミュは「愛」三部作を構想していたことが本書では強調される。愛なくして絶望はないし、絶望なくして愛はない。それゆえカミュにとって「愛」は出発点であり到達点でもあった。愛と絶望の緊張関係に身を置き、その狭間で生き続けること、それがカミュの生き方だった。

(はや)

(二〇四頁 税込二〇五六円 9月刊)

隣の国の文学を読む 翻訳者・斎藤真理子の仕事を通して

今年もノーベル文学賞が発表された。受賞は、韓国の作家ハン・ガン。本屋の売り場の様子が目に浮かぶ。あの棚に、あの平台に、ハン・ガンの本は並んでいたな、と。幸運なことに、彼女の作品の多くが日本語に翻訳されていてすぐに読むことができる。ハン・ガンの作品だけではない。今、韓国の多種多様な文学作品が日本の読者に開かれている。さあ、隣の国の文学を読んでみよう。最初におすすめしたいのが次の二冊だ。翻訳者・斎藤真理子の仕事を通して、韓国文学への最初の一步を踏み出そう。

『隣の国の人々と出会う』 韓国語と日本語のあいだ (創元社)

本書は、斎藤真理子が朝鮮半島の言語と歴史、そして文学について書いた一冊。キーワードとなるのが、말(言葉)、문(文、文学)、そして소리(声、音)。マルは「話され、聞かれるもの」で、クルは「書かれ、読まれるもの」。より広い意味を持ち、前の二つを包括するのがソリである。ハンゲルの仕組みや成り立ちについても書かれており、読むほどに韓国文学の解像度が上がっていく。

韓国の文学史を書くときそれは現代史そのものになると齋藤は言う。植民地統治下の三・一独立運動、済州島四・三事件、朝鮮戦争、四・一九革命、光州事件と、韓国は「無念の大量死の蓄積」をその根底に抱える。そして、これら無念の真相を市民らが知ることは許されなかった。だから報道規制の中、新聞には詩が載った。詩は武器となった。韓国において、人々のソリを拾い上げてマルやクルにする作家の仕事は重要であり続ける。文学は現実のそばにあるのだ。韓国語には「マルらしめないマル」＝「言葉ともいえないような言葉」と言う表現があるようだ。日本の植民地時代から民主化に至るまで、彼らのマルは、言葉の形をしながらも中身の無い、そんなマルにならざるを得なかった。また、マルには「道理」の意味も込められる。二〇一四年のセウォル号事件では、政治家の他責的な言葉や被害者への誹謗中傷が溢れた。これらもまた「マルらしくないマル」である。マルは幾度も危機に瀕する。「言葉で言葉に対抗することは可能だろうか」。作家たちは、それでもマルに賭ける。

『これほど似ているか』 (河出書房新社)

斎藤真理子によって翻訳された本書は、韓国SFを代表する作家、キム・ボヨンによるSF短編集。「静かな時代」では、脳波によって個人のイメージをダイレクトに伝え合う「マインドネット」というものが登場する。舞台は大統領選挙。政治活動の経験もない無所属の青年が突如支持を集め始める。マインドネット上で活動する彼は、若者から大きな支持を得ていた。そんな折、認知言語学者のシン・ヨンヒは、現与党の国会議員補佐官からアドバイザーの依頼を受ける。その人の全てが脳に直接共有されるマインドネットに対して、シン・ヨンヒは言葉を量産して戦う。「心は水で、言語は器だよ。水は器によって形が変わるんだから」と。しかし、青年の支持者たちには響かない。次世代の人々とは言葉に価値を置いていないのだ。政治家たちの空虚な言葉から生まれた言葉への不信は、果たして「言葉の時代」を終わらせてしまうのだろうか。

二冊を読むと、物語が現実と地続きであることを強く感じる。例えば、人々のマルへの思いが現実とSF世界のあいだで重なるって見えることで、クルの向こうにあるソリに気づくことだ。(くらむ)

至近距離で真実を捕らえる——横田増生と潜入取材

二〇二二年一月、ワシントンD.C. バイデンの大統領就任を阻止すべくトランプ支持者が連邦議事堂へ突入した暴動の渦中に、一人の日本人がいた。ジャーナリスト・横田増生——民主主義を大きく揺るがす「トランプ現象」の実態に迫るため、彼は共和党のボランティアに潜入していた。『トランプ信者』潜入一年（小学館）で彼は、アメリカ国民がいかにして「トランプ信者」になっていったかを克明に描いている。それは、トランプが自分に都合の悪い事実を「フェイクニュース」と



罵倒し続けることで、やがて多くの国民がその論理を無批判に受け入れ「信者」になっていく過程があり、事実をもとに議論するという民主主義の大前提が崩壊する瞬間であった。

横田の定義によると、潜入取材とは「取材相手に自分を明かさず、労働者や組織の一員としてもぐりこんで取材して、そこでの体験をもとにノンフィクションの記事や書籍を発表する」取材手法である。横田はこれまで幾度となく潜入取材を敢行し、都合よく取り繕われた外面の奥に隠された、ありのままの真実を報じてきた。

『潜入ルポ アマゾン帝国の闇』（小学館新書）では、ネット書店に始まり生活のインフラにまで成長した米企業アマゾンの魚の面に光を当てる。通販の配送センターへアルバイトとして潜入するのを皮切りに、宅配ドライバーやアマゾンに委託出店する業者、出版業界を取材していく。見えてきたのは、労働者を酷使し取引企業にはアマゾンに有利な条件をのませる、弱肉強食の企業体質だった。

即日配送という利便性を追い求め、商品のピッキング作業では秒単位で管理し効率化することで労働者の身体を限界まで消費し、低運賃で大量の荷物を配達員に押し付ける。マーケットプレイスの出品業者はアカウント閉鎖や手数料値上げを恐れ、出版業界は直取引への対応を迫られている。労働者や取引先から利益を搾り取り、すべて利便性に投資するという「アマゾン商法」は、消費者の依存度を高めることに成功している。横田は本書で、貪欲に自社の利益を追い求める企業に依存する危険性を現代社会に訴えている。

「日本の社会が、もしかしたら潜入記者が周りにいるかもしれない」と意識するようになると、不正行為や不祥事への抑止力になる。こうした問題意識から、横田が二〇年以上にわたる潜入経験のノウハウを一冊に詰め込んだのが『潜入取材 全手法』（角川新書）だ。本書の内容は潜入時の記録・調査手法、ファクトチェックや執筆術と、非常に網羅的である。中でも印象的なのが訴訟の記録だった。

二〇一一年、横田はユニクロの労働問題を指摘した記事を名誉棄損で訴えられる。自社に都合の悪い言論を封じ込めることを目的とした「SLAPP裁判」だ。裁判で問われたのは、報道が真実だと信じるに足る取材が尽くされたか、社会に資する公益性を有するかどうかという点。スラップ裁判の窓口を卑劣と非難しながらも正当性を立証する姿勢は、身を守りながら真実に踏み込んでいくジャーナリズムの気概にほかならず、報道の責任と矜持がひしひしと感じられた。

本書が提示しているのは適切な情報処理の技術であり、アカハラやパワハラに対する護身術にもなる。ジャーナリズムにとどまらず、不平に声を上げる全ての人の後押しとなるだろう。（たいやき）

編集後記

早いもので、今年も残すところあとひと月となりました。少々気が早いですがせつ々かなので一年の振り返りを。今年一年継続して取り組んだのが『サー・ガウェインと緑の騎士』の読書会。14世紀後半に書かれたとされる、アーサー王の甥・ガウェインが主役の物語です。ちょうどこの季節のお話ですので、少し紹介したいと思います。

クリスマスのある日、アーサー王の宮廷では新年の祝宴が催されます。そこに突如現れるのが緑の騎士。なんと全身緑色。この緑の騎士の登場は、それは丁寧に描写されています。そこだけで読書会まるまる一回分（いや、もっと必要だったかも……）使って読むほどです。一語一語隅々まで楽しみました。

さて、緑の騎士は円卓の騎士らに首斬りゲームを吹っ掛けます——私の首に一撃入れてみよ。お返しは1年後のクリスマス、その者の首に一撃を。受けて立ったのがガウェイン。緑の騎士の首を切り落とします。転がり落ちる首……なんと緑の騎士はそれを拾って再び語り始めます。今年読んだのはここまでです。

来る年には続きを読む楽しみが待っています。願わくは、皆さまの新年にも読書の楽しみがあらんことを。『綴葉』がその一助となれば幸いです。どうぞ良いお年を。（ひるね）

当てよう！ 図書カード

今年も早いものでもう12月です。年末年始は皆さんどのようにお過ごしでしょうか。私は論文執筆に追われそうです。さて、年末の風物詩と言えば除夜の鐘ですが、実は除夜の鐘をつく回数は決まっています。いったい何回つくのでしょうか。

- | | |
|---------|---------------|
| 1. 33 | 2. 108 |
| 3. 3000 | 4. 5670000000 |

（筏）

《応募方法》 答えを書いた読者カードを、生協のひとことポストに投函してください。下記QRコードのリンク先 (<https://forms.gle/evEccphotDZiZURY7>) から応募することも可能です。正解者の中から5名の方に図書カードを進呈いたします。応募締め切りは1月15日です。



《8・9月号の解答》 8・9月号の問題の正解は、2. のコッホでした。北里が留学したのはドイツで、フレミングとパスツールはそれぞれ英、仏の細菌学者。レフラーは北里と同じ、コッホの門下生です。図書カードの当選者は、ゆうこさん、東大路優馬さん、いわさん、青でんぶさん、えび天天さんの5名です。当選おめでとうございます。（水炊き）

読者がらひりつ

〇何となく手に取った本を読んだ後、過去に綴葉で紹介されていないか確認するようになりました。毎号Xに書名・著者名をポストしてくださっているのが検索しやすくて助かります。最近はお小川哲『君のクイズ』読後、バックナンバーにたどりつきました。二度美味しい読書に役立っています。

（文学研究科職員・青でんぶ）

——読後にひとの書評を読むと、同じ印象や違う観点がさまざまに味わえますよね。過去の読者と、時間を超えて言葉を交わせた気分になります。逆に言えば、本について書き記し、公開することは、未来へ言葉を繋げることにもなるわけですね。言葉やアーカイブとはそのようなタイムマシンなのかも知れず、そもそも本それ自体が、時を超え得るものなのだと思います。本誌がそのような場になっているのだとすれば、嬉しい限りです。

〇京大作家インタビュ、続けてほしい

（理学部・えび天天）

——そう言っていたんだけど、インタビュアのひとりとして頑張った甲斐がありました。作家と読者のあいだを（書評以外でも）繋ぐ、恒例企画にしたい……！

（水炊き）